

2 宇土半島基部における後期古墳の変遷

高木恭二

はじめに

熊本平野と八代平野の間に位置する宇土半島基部には、数多くの古墳が知られている。特に前期とみられる前方後円墳7基の存在は、九州でもかなり早い段階に属するものであることが知られ、日本列島の西南地域にあるがゆえに、古墳の広がりを考えるうえで重要なものとなっている。これら宇土半島の古墳文化については、すでに富樫卯三郎氏による先駆的研究⁽¹⁾があり、これを端緒としていくつかの編年案や地域区分がなされている⁽²⁾。

今回、椿原古墳の調査をきっかけとして、この地域の古墳の終焉の問題を考える必要性が生じてきたが、改めて研究を振り返ってみても、宇土半島基部における古墳時代後期から終末期に限っての編年や地域のとらえ方の問題などについての研究は、ほとんどなされてこなかったといえよう。

このことはまた、前方後円墳がどのような形で、いつ終わるのかという問題をも当然含むことになるが、近年の調査事例の増加や、研究の進展によって明らかになりつつあるので、それらを考慮しながら後期古墳の編年⁽³⁾を行なうことにする。

なお、編年の基準となる尺度は須恵器を用いることになるが、熊本県下における須恵器生産の様相や消費地との関連については、近年になってやっと研究の端緒⁽⁴⁾がなされた程度であり、まだ編年が確立しているというわけではない。後期段階において地方窯が成立し、その製品が流通していることは明らかであるが、いまだ地域の実態に即した須恵器編年を提示できる段階ではないし、それだからといって北部九州の編年をそのまま適用できるかどうかについても意見の一致をみているわけではない。ここでは暫定措置として、北部九州編年と近畿地方の陶邑編年⁽⁵⁾に依拠せざるをえない。

1. 地域区分

宇土半島基部において前期前方後円墳が7基築かれているにもかかわらず、これに続く中期に属する前方後円墳はほとんどなく断絶があり、後期にいたってふたたび前方後円墳が築かれるという状況である。つまり4世紀末ないしは5世紀はじめころを境にして、それ以後はほとんど古墳が築かれなくなり、5世紀後半ないし末になってふたたび盛んに古墳が造営されるのである。

その意味では、前期・後期古墳の造営者との関係がどのようなものであったのか、あるいはまた中期段階での大きな断絶をどのように解釈するのかということも重要な問題で、興味のもたれるところであるが、それらの関連性について今回は触れない。

さて、宇土半島基部における古墳の築造が、5世紀末前後に再び隆盛をむかえるようになるということを述べたが、本稿ではそれから以降、7世紀中ごろまでに築造された古墳について概観することになる。第45図は半島基部における後期古墳の分布を示したもので、これをみればわかるように、四つのまとまりをなしながら分布するということがわかる。この4群をそれぞれ(1)轟・緑川群(2)不知火西群(3)不知火東群(4)花園・松橋群の地域名称で呼ぶことにする。

2. 各地域の古墳

(1) 轟・緑川群

椿原古墳を含む一群であり、後期に該当するとみられる前方後円墳は知られていない。ただ、

宇土半島基部の後期古墳

	(1)瀧・緑川群	(2)不知火西群	(3)不知火東群	(4)花園・松橋群
前方後円墳		国越古墳	仁王塚古墳	男塚古墳 女塚古墳
前方後円墳 消滅後の有 力古墳	椿原古墳		御領東原 3 号墳 鬼塚古墳	鬼ノ岩屋古墳
有埴輪古墳	石ノ瀬（古墳？）	道免古墳 国越古墳	塚原平古墳	山下古墳
装飾古墳	椿原古墳 仮又古墳 梅崎古墳	国越古墳 桂原古墳 桂原 2 号墳	塚原 1 号墳	
有石棚石室		立山鬼の岩屋古墳 桂原古墳		
ピンク石割 抜玄門使用 古墳	椿原古墳 ？梅崎古墳 ？城塚古墳 御殿山古墳		塚原 1 号墳 塚原 7 号墳 御領東原 3 号墳	
灰黒色石割 抜玄門使用 古墳		桂原古墳		
灰白色石使 用古墳				宇賀岳古墳 当尾夫婦塚 4 号
須恵器窯跡		元米ノ山窯跡 朱斗叶松窯跡		当尾窯跡 萩尾大溜池窯跡
拠点集落	宇土城城山遺跡	不明	小曾部南請遺跡 北園遺跡	境目遺跡

半島基部の低位に位置する現在の宇土市街の一面にあたる石の瀬遺跡から円筒埴輪が少なからず発見されており、この場所は古墳であったとみてよからう。海拔標高は約 5 m あり、旧緑川の氾濫にともなう微高地上にあたるが、墳形や墳丘規模、それに内部主体などは、近世はじめ頃の出城や江戸時代の武家屋敷による破壊によって明らかではない。前方後円墳ないし大型の円墳であった可能性もある。

椿原古墳の西、金嶽山の西斜面部には金嶽山古墳があり、横穴式石室が露出する。同じく椿原から約 450 m 西にある東畑古墳（飯塚天神古墳）も石室が露出しており、その概要を知ることができ、地ならしによって削平された墳丘の一部から周溝が検出され、須恵器が発見されている。仮又古墳は、京都大学による装飾古墳調査によって船の線刻があるということが著名であり、数艘の船が船団を組んでいるかのようなさまによって、古墳時代当時の海上交通の盛んな様子を知る好材料となっている。墳丘に外護列石をめぐらし、若干の須恵器が見つかっており、石室は現状では無袖のように見える⁽⁶⁾。他には山王平古墳・古城古墳石材・東畑 2 号墳・神ノ木山古墳・城塚古墳などがあり、その西になると梅崎古墳・御殿山古墳・小池平古墳などが有明海にむかって派生する丘陵の先端部に 1～2 基が点在し、その大半は横穴式石室である⁽⁷⁾。このうち、割抜玄門をもつものとしては、椿原古墳・御殿山古墳があり、城塚古墳・梅崎古墳もその可能性が極めて高い。

墳丘の大きなものはなく、全体としての墳丘規模は小さい。後期において大古墳が築かれた地域ではないが、古墳は連綿と築かれている。なお、この地域の西限として小池平古墳までを挙げたが、これより西部地域にある古墳は全て中期に属するものばかりであり本論から、はずれることになるので除外する。

拠点集落遺跡としては宇土城跡城山遺跡が該当する。



宇土半島基部古墳・遺跡一覧

1. 椿原古墳
2. 金嶽山古墳
3. 東畑古墳
4. 東畑2号墳
5. 仮又古墳
6. 仮又2号墳
7. 山王平古墳
8. 石の瀬遺跡
9. 神ノ木山古墳
10. 神ノ木山2号墳
11. 城塚古墳
12. 尾ノ山横穴墓群
13. 梅崎古墳
14. 御殿山古墳
15. 小部田横穴墓群
16. 小池平古墳
17. 小池平2号墳
18. 馬門石切場跡
19. 網引石切場跡
20. 宇土城古墳参考他
21. 大平横穴墓

22. 仁王塚古墳
23. 鬼塚古墳
24. 塚原平古墳
25. 塚原平2号墳
26. 柳迫古墳
27. 大迫1号墳
28. 大迫2号墳
29. 塚原1号墳
30. 塚原2号墳
31. 塚原5号墳
32. 塚原6号墳
33. 塚原7号墳
34. 神の元1号墳
35. 神の元2号墳
36. 道免古墳
37. 国越古墳
38. 元米の山窯跡
39. 朱斗叶松窯跡
40. 塩屋浦鬼の岩屋1号墳
41. 塩屋浦鬼の岩屋2号墳
42. 桂原古墳
43. 桂原2号墳

44. 立山鬼の岩屋古墳
45. 御領1号墳
46. 御領2号墳
47. 御領3号墳
48. 桶底古墳
49. 宇賀岳古墳
50. 山下古墳
51. 女夫塚古墳(男塚古墳)
52. 女夫塚古墳(女塚古墳)
53. 三日鬼ノ岩屋古墳
54. 池尾古墳
55. 大道夫婦塚古墳(男)
56. 大道夫婦塚古墳(女)
57. 山口1号墳
58. 山口2号墳
59. 当尾小学校窯跡
60. 萩尾大溜池窯跡
61. 豊福古墳
62. 神の上古墳
63. 宇土城遺跡
64. 小曾部南諸遺跡
65. 境目遺跡

----- 旧郡境(推定)
 近世以降の干拓

第45図 宇土半島基部後期古墳・遺跡分布図

(国土地理院発行の熊本・八代 1:50,000を縮小して使用)

(2) 不知火西群

全長約65mの前方後円墳である国越古墳は、切り石造り横穴式石室に退化した直弧文を主体とした装飾文様が描かれ、豊富な遺物が石室内部から発見された。墳丘からは円筒埴輪だけではなく人物をはじめとする数多くの形象埴輪も出土し、近くに位置する道免古墳からも円筒埴輪が出ている。塩屋浦鬼の岩屋1号墳・同2号墳も横穴式石室のようであるが、詳細は不明で、桂原古墳は線刻による船の装飾をもつということがよく知られている。桂原2号墳の線刻船には波濤文が表現されており、立山鬼の岩屋古墳も横穴式石室が開口し、桂原古墳と同様に石柵をもつ。

この西群の一面には、古墳時代における窯業生産を物語る朱斗叶松窯跡⁽⁸⁾及び元米ノ山窯跡があり、後述の松橋窯跡群と並んで早い段階での須恵器生産の一拠点として注目される。集落遺跡は現在までのところ知られていない。

(3) 不知火東群

全長47mの前方後円墳である仁王塚古墳、それに鬼塚古墳や塚原平古墳などの一群と、宇土市松山の高城から南へ延びる丘陵上に点在する古墳の一群がある。

前者には、仁王塚古墳・鬼塚古墳のほか、塚原丘陵の塚原1号墳～7号墳・大迫北古墳・大迫南古墳・神の元1号墳・神の元2号墳・塚原平古墳・塚原平2号墳・大平横穴墓、その他にも消滅した古墳がかなりあったといわれる。仁王塚古墳は空壕をもつ前方後円墳であるものの埴輪は伴わないようであるが、塚原平古墳は直径14mの円墳ながら円筒埴輪をめぐらす。また、鬼塚古墳は直径40mの大型の円墳であり、巨石を用いた横穴式石室が露出する。この古墳はその他の小円墳とは一線を画する。なお、塚原1号墳にも線刻船があり、塚原2・7号墳は阿蘇ピンク石（馬門石）製の刳拔玄門をもつ。

後者の一群には、御領東原1・2・3号墳、柏原古墳などがあり、さほど数は多くない。いずれも埴輪をもたず円墳であろうとみられるが、詳細は不明である。この中では御領東原3号墳が、最も墳丘の規模も大きい。なお、この古墳にも阿蘇ピンク石の刳拔玄門が用いられていたものとみられる。

不知火東群の集落としては、小曾部南請遺跡・北園遺跡がある。

(4) 花園・松橋群

後期においては花園に一大拠点を形成しているかのようであるが、それ以前の中期にはこれらよりやや西によった松山から立岡にかけての地域に点在しており、全体の傾向としては奥津城を徐々に東に移しているとみてよい。

前方後円墳としては女夫塚古墳の男塚、同じく女塚古墳が共に前方後円墳で、円墳に埴輪をもつ山下古墳、それに巨石を用いた三日鬼の岩屋古墳などで一群が形成される。

花園群の西にあたる松橋町古保山付近にも数基の古墳が知られており、六世紀前半から中頃にあたる時期の妻入横口式石棺を内蔵するらしい古墳であることが判明している。なおこれらの古墳に使われている石材は、阿蘇石の中でも灰白色を帯びる石で、これは、松橋町宇賀岳古墳においても同様である。この灰白色の石材が花園・松橋群にだけしか用いられた形跡がなく、逆にピンク石のものは轟・緑川群と不知火東群のいずれかにしか用いられないという明確な使い分けがあり、灰白色石石工とピンク石石工を掌握していた集団に違いがあったということ⁽⁹⁾はまず間違いなからう。

花園群の集落としては宇土市境目遺跡がある。

3. 古墳の時期と須恵器生産

轟・緑川群の、石の瀬遺跡出土の埴輪は、川西宏幸氏による円筒埴輪編年⁽¹⁰⁾のⅣ期に該当する。宇土半島基部における害窯焼成の埴輪でⅣ期に属するとみられる埴輪は、他には不知火群の道免古墳の例があるだけで、石の瀬遺跡の場合は、おそらく大型の円墳か前方後円墳であつたろう。

東畑古墳の須恵器は、小田富士雄氏による須恵器編年のⅢB期～ⅣA期で、中村浩氏編年によるⅡ-3、4型式（以下中村編年を括弧書きで併記）の6世紀後半から末。仮又古墳の場合はⅤ期（Ⅲ-1型式）の7世紀中ごろとみられる。椿原古墳も数多くの須恵器が発見され、ⅣA期からⅣB期（Ⅱ-5型式）の7世紀前半ころとみられる。

不知火西群の道免古墳埴輪がⅣ期で、国越古墳はⅤ期。国越古墳墳丘からはⅢA期（Ⅱ-2型式）の6世紀中ごろに属する須恵器が出土している。

刳抜玄門で、船の線刻が表現される桂原古墳からは遺物の出土がなく所属時期を明らかにし得ないが、玄門はL字形2石をあわせた刳抜玄門で、2重玄門という点から熊本市天福寺裏山2・3号墳との共通性をうかがわせる。

朱斗叶松窯跡から出土した須恵器は、ⅣA期からⅣB期（Ⅱ-5型式）の7世紀前半ころとみられる。元米ノ山窯跡のものは、それよりややさかのぼるⅢB期～ⅣA期（Ⅱ-3、4型式）で、6世紀後半に比定できよう。

不知火東群の仁王塚古墳は、埴輪を伴わない段階の前方後円墳であるとみられ、逆に塚原平古墳は円墳に円筒埴輪をめぐらす。塚原平から出土した須恵器は、ⅢB期でも古い段階（Ⅱ-3型式）の6世紀中ごろから後半にかけての時期とみられ、仁王塚古墳は6世紀後半から末のころ。その他の鬼塚古墳・塚原1・2・7号墳などは、時期の決め手となる遺物が出ていないことから詳細は不明ながら、6世紀末から7世紀前半の所産とみられる。仁王塚古墳に続いて有力な古墳としては鬼塚古墳が挙げられよう。

花園群において、5世紀末から6世紀前半の所産とみられる古墳は未見であるが、Ⅴ期の埴輪をもつ山下古墳が6世紀中ごろから後半にかけて、埴輪を使用しない前方後円墳である男塚古墳と女塚古墳は6世紀後半とみられ、その後には三日鬼の岩屋古墳が続くものとみられる。また、宇賀岳古墳の特色ある横穴式石室が、山陰の石棺式石室の祖形⁽¹¹⁾と見られており、6世紀中ごろから後半にかけての時期が考えられる。

須恵器生産についても簡記しておく必要がある。それは、熊本県下における須恵器生産のはじまりが、これまでのところ宇土半島基部付近が最も古いらしい⁽¹²⁾という事情があるからである。これは本報告においても収録されているように、近年、三辻利一氏や中原幹彦氏等によって精力的に進められている須恵器の胎土分析と考古学的分析によっても裏付けされ、さらに生産と消費地の関係についても明らかになりつつあるからである。

ところで、旧宇土郡に属する地域には、これまでのところ4箇所において須恵器窯跡が発見されている。宇土郡不知火町の元米ノ山窯跡と朱斗叶松窯跡でこれらは約1 kmしか離れておらず両窯を不知火群と呼び、下益城郡松橋町当尾小学校窯跡や萩尾大溜池窯跡の松橋群とをあわせ、旧宇土郡には2群あるということになる。不知火群の元米ノ山窯からは小田編年ⅢB期（Ⅱ-3）、萩尾大溜池窯跡からは小田編年Ⅱ期（Ⅰ末-Ⅱ初）、当尾小学校窯跡からは小田編年ⅣA期（Ⅱ-4）の須恵器が出土しており、さらに古くなる可能性があるともいわれる。こ

これらのことは、地方窯成立に宇土半島基部の勢力が積極的に関与したということを示しており、今後の研究成果に寄せる期待は大きい。

4. 石室構造の変化

宇土半島基部における後期から終末期にかけての古墳で、内部構造の判明しているものは全て横穴式石室である。しかし各古墳はそれぞれ特色ある石室を持っており、地域によって石室の基本構造は共通している場合や若干の違いがあるなど、多様である。

椿原古墳の横穴式石室は、羨道部と玄門部がほぼ完存しているものの、玄室奥壁や右壁、それに天井部などを欠失しており全容を知ることはできない。とはいえ残された部分によって概要を知ることができるので、他の古墳と石室構造を比較することにしたい。

玄室左壁は高さ約120cmの腰石があり、その上には3～4石が天井部にかけてやや持ち送りぎみにドーム状に積まれる。奥壁も腰石ないしは鏡石状に基底石が据わるようであり、右壁も同様であったと考えられる。

宇土半島基部の横穴式石室において、玄室壁面の基底に腰石を用いるものは多く見られるが、この腰石を使う古墳としては、凝灰岩の切石を用いるものと、安山岩などの自然石を用いるものの2種がある。前者は国越古墳に代表されるもので、後者は塚原平古墳や桂原・椿原古墳その他相当数にのぼる。

前節の古墳時期から見れば、国越古墳が6世紀中ごろで、塚原平古墳がそれにやや遅れる6世紀中ごろから後半にかけての頃に造られたということは、出土遺物からも明白である。しかし、国越古墳の腰石の高さが約110cmあるのに、塚原平古墳の場合は約60cmと高さの点だけからは逆転しており、必ずしも腰石の高さだけでは時期区分の根拠とはならない。しかし、国越古墳は前方後円墳で石室全体において凝灰岩切石を多用しており、石障系横穴式石室の系譜をひくものであるということが判明しているので、円墳に安山岩や砂岩を混用する塚原平古墳その他の場合とは異なる。

後期・終末期古墳において刳拔玄門に凝灰岩切石を用いる例がこの地域に多いことは幾度となく述べたが、その場合、凝灰岩切石は玄門部ないしは閉塞石にだけ限定的に用いられる。前方後円墳の国越古墳では石室各所において切石が多用されており、他には女塚古墳の男塚古墳と女塚古墳も同じであったようであるが、残念ながら両古墳が早い段階に破壊され、石室の調査も実施されていないことなどから詳細はわからない。

ただいえることは、宇土半島基部では凝灰岩切石を横穴式石室に多用するのは前方後円墳に限られるらしいという点と、円墳や方墳などにおいて凝灰岩は刳拔玄門だけに限定的に用いられるという点である。

切石を多用しない横穴式石室において、腰石がみられるのはこの地域では塚原平古墳が最初であり、これに続くのは東畑古墳や桂原古墳などである。刳拔玄門は、塚原平古墳ではみられず、東畑古墳は、刳拔玄門ではないものの阿蘇灰石の切石を使用しており、これに続くともみられる桂原古墳ではL字形の2石を用いた刳拔玄門となっている。先に挙げた4地域のうち、刳拔玄門をもつ古墳は轟・緑川群と不知火西群、それに不知火東群だけで、そのうち阿蘇ピンク石を用いているものは轟・緑川群と不知火東群である。刳拔玄門ではなくても、阿蘇ピンク石を使った古墳は、不知火西群と花園群ではみられないという明確な違いがある。

塚原平古墳の腰石は玄室全体の高さからみれば低いが、東畑古墳や桂原古墳では腰石が側壁のかなりの部分をしめており、塚原平との差は歴然としている。出土遺物からは、塚原平古墳

の後に東畑古墳が築造されたことは間違いないであろうから、腰石使用の点では6世紀後半段階での大きな飛躍がある。また、刳抜玄門は、塚原平古墳、東畑古墳段階では未採用で、これに続く桂原古墳・椿原古墳の頃に刳抜玄門は用いられるようになったものと考えられる。

現段階で判明している刳抜玄門をもつ古墳のうち、最も古いものは大野窟古墳とみられ、その近くの岩立C古墳など、氷川下流域付近で6世紀中ごろから後半の頃に考案されて、宇土半島において6世紀後半に採用されるようになったのであろう。氷川下流域付近のものは全て窓状に刳り抜くものであるが、宇土半島のものは窓状に刳り抜くものと、L字形やコ字形の2石を組み合わせるものの3種がある。桂原古墳がL字形であり、椿原古墳がコ字形であるところからみて、窓状→L字形→コ字形と変化していったものとみられるが、宇土半島基部での刳抜玄門をもつ古墳の調査例が少ないため、この点は今後の課題としておきたい。また、熊本市天福寺2・3号墳では窓状刳抜ながら桂原古墳と同じく2重玄門となっており、3古墳は何らかの関連性がうかがわれ、石室の型式変化からは天福寺3号墳、同2号墳、桂原古墳の順に推移した可能性がある。

なお、旧稿⁽¹³⁾において筆者は八代平野氷川下流域の最後の前方後円墳を端ノ城古墳とみたが、今回改めてこれに続くこの地域最後の前方後円墳として刳抜玄門をもつ大野窟古墳を位置付けておきたい⁽¹⁴⁾。全国の横穴式石室において天井高が最も高いとみてよいこの古墳は、その異常なまでの石室の高さを覆うために後円部の墳丘を高くせざるをえなかったため、前方部との較差があまりにも大きくなったものとみられる。

6世紀後半段階での著名な前方後円墳である見瀬丸山古墳も似たような墳形であり、このような例は全国的にも多い。地域は異なるが、6世紀段階に入って大きな古墳が築かれる長崎県壱岐島の多くの前方後円墳において同様な例を数多く実見し、その感をいっそう大きくしたが、横穴式石室羨道部は平天井で、大野窟古墳と似た構造であり、その共通点は偶然とは思えない。

おわりに

宇土半島基部の4地域の古墳の動向について簡単に見てきた。それぞれの地域によって古墳の絶対数の違いや、前方後円墳の有無、墳丘規模の違い、それに埴輪の使用、装飾の有無と文様の違い、内部主体の違いなどの点に特色を見いだすことは可能であるように見られ、須恵器窯跡や拠点的な集落遺跡を含め、別表のように整理できる。

轟・緑川群の西では小池付近にまで後期古墳は造られているが、これより西側に後期に属するものがないということは前に述べた。このことは、宇土郡四郷の中心地を比定する場合に、これまで有力であった「大宅郷」を網田にあてるという地名や文献からの推測についてやや疑問をなげかける結果となるであろう。

このことは、既に甲元眞之氏によっても明らかにされている⁽¹⁵⁾ のであるが、今回のように後期から終末期にかけての律令期に近い時期の古墳編年から導きだされた結果からみて、宇土郡の四郷の中心地は、いずれも宇土半島基部であった可能性が高いのである。

なお、旧宇土郡の東部地域では現在下益城郡松橋町のかなりの部分（古保山・曲野・大野・松橋・萩尾・浦河内）が、もとは宇土郡であったということは、中世阿蘇家の甲佐社領文書案によって明らか⁽¹⁶⁾ であり、須恵器窯跡がこの地域と不知火西群の2地域にあったということも重要である。

なお、この地域では群集墳を形成しないし、横穴墓の数も極めて少ないということも忘れてはならない現象であり、その意味についても改めて別の角度から考えてみる必要がある。

謝辞) 稿を草するにあたり、以下の方々をはじめとして多くの方々のご教示をいただいた。銘記して謝意を表したい。

飯田考俊、角田徳幸、木下洋介、藏富士寛、甲元眞之、佐藤伸二、白石太一郎、
谷口義介、富樫卯三郎、中原幹彦、三島格、村井真輝、柳沢一男

註

- 1、a 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」宇土城跡（西岡台）、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年。
b 富樫卯三郎「古墳の立地と周辺の遺跡」向野田古墳、宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年。
- 2、a 佐田茂「大宰府成立前夜における地方豪族の動向」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館、1983年
b 佐藤伸二「先史・原史時代」『豊野村史』1991年。
c 甲元眞之「古墳時代首長系譜の類型化－九州での事例的考察－」『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生古稀をお祝いする会編（勉誠社）、1995年。
- 3、ここで述べる後期とは、前方後円墳集成編年の8・9・10期を指すが、これに続く終末期についても必要に応じて述べる。
近藤義郎編『前方後円墳集成、九州編』山川出版社、1992年。
- 4、中原幹彦「熊本の古墳時代須恵器素描－新発見窯跡資料の紹介をかねて－」『肥後考古』第9号、肥後考古学会、1996年。
- 5、a 八女古窯跡調査団『塚ノ谷窯跡群』『中尾谷窯跡群』『菅の谷窯跡群』『立山山窯跡群』1969年～1972年（小田富士雄編年案）。
b 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房、1981年。
- 6、a 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州における装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究報告第3冊、1919年
b 平山修一「仮又古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第6集、1982年。
- 7、宇土市教育委員会編「宇土半島基部古墳群」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第15集、1987年。
- 8、註4書に同じ。
- 9、高木恭二「石棺式石室と肥後－宇土半島基部における源流的要素－」『古代の出雲を考える』8、横穴式石室にみる山陰と九州、1995年
- 10、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年。
- 11、a 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4、朝鮮三国と倭国、学生社、1980年。
b 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』6、1987年
c 角田徳幸「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集、1993年。
- 12、松本健郎「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ－須恵器窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡－」熊本県文化財調査報告第48集、1980年。
- 13、高木恭二「肥後」『全国古墳編年集成』（第2刷）、雄山閣出版、1997年。
- 14、白石太一郎氏の指摘によって見直しを行なった。
- 15、甲元眞之註2 c書に同じ。
- 16、三島格ほか「古墳時代」『城南町史』1965年。